

堤中納言物語
つつみちゆうなごんものがたり

貝合
かいあわせ

ながつき ありあ
長月の有明けの月にさそはれて、蔵人の少将、指貫つきづきしくひ
くらうど せうしやう さしぬき
きあげて、ただひとり小舎人童ばかり具して、やがて朝霧もよくたち
ことねりわらわ ぐ あさぎり
かくしつべく、ひまなげなるに、

「をかしからむところの、あきたらむもがな」

こだち
といひてあゆみゆくに、木立をかしき家に、琴の声ほのかに聞こゆる
きん
に、いみじううれしくなりてめぐる。門のわきなど、くづれやあると
かど
みけれど、いみじく築地などまたきに、なかなかわびしく、いかなる
つちじ
人のかくひきゐたるならむと、わりなくゆかしけれど、すべきかたも
おぼ
覚えで、例の、声いださせて隨身にうたはせ給ふ。
れい たま

ゆくかたも忘るるばかり朝ぼらけひきとどむめる琴の声かな

とうたはせて、まことに、しばし、内より人やと、心ときめきし給へ
ど、さもあらぬはくちおしくて、あゆみすぎたれば、いとこのましげ
なる童四五人ばかり走りちがひ、小舎人童、男など、をかしげなる
わらわ おのこ
小破子やうのものをささげ、をかしき文、袖の上のうちおきて、出で
こわりこ ふみ そで

入る家あり。なにわざするならむとゆかしくて、人目みはかりて、やをらはひいりて、いみじくしげき薄すすきのなかにたてるに、八九ばかりなる女子おんなごの、いとをかしげなる、薄色うすいろの柏あこめ、紅梅こうばいなどみだれ着たる、小さき貝るりを瑠璃つぼの壺つぼにいれて、あなたより走るさまの、あわただしげなるを、をかしとみ給ふに、直衣なおしの袖そでをみて、「ここに人こそあれ」と、なに心なくいふに、わびしくなりて、

「あなかまよ。聞こゆべきことありて、いとしのびて参りきたる人ぞ」と、「より給へ」といへば、

「あすのこと思ひ侍はべるに、いまよりいとまなくて、そそき侍はんべるを」とさへづりかけて、往ぬいべくみゆめり。をかしければ、

「なにごとの、さいそがしくは思おぼさるるぞ。まろをだに思さむとあらば、いみじうをかしきことも、人は得えてむかし」

といへば、名残なごりなくたちどまりて、

「この姫君ひめぎみと上うへの御方おんかたの姫君と、貝合せさせ給はむとて、月ごろいみじくあつめさせ給ふに、あなたの御方は、大輔だいふの君、侍従じじゆうの君と、貝合せさせ給ふとて、いみじく求めさせ給ふなり。まろが御前おまえは、

ただ若君わかぎみ一ひとところにて、いみじくわりなく覚ゆれば、ただいまも、
姉君あねぎみの御もとおんに人やらむとて。まかりなむ」

といへば、

「その姫君たちのうちとけ給ひたらむ、格子こうしのはさまなどにてみ
せ給へ」

といへば、

「人に語り給はば。母もこそそのたまへ」
とおづれば、

「ものぐるほし。まろはさらにもいはぬ人ぞよ。ただ、人に勝たか
せ奉たてまつらむ、勝たせ奉らじは、こころぞよ。いかなるにか、ひともの
いふぞ」

とのたまへば、よろづ覚えで、

「さらば帰り給ふなよ。かくれつくりて据すゑ奉らむ。人のおきぬさ
きに、いざ給へ」

とて、西の妻戸つまどに、屏風びょうぶおしたたみよせたるところに据すゑおくを、ひ
がひがしく、やうやうなりゆくを、「をさなき子をたのみて、見もつ
けられたらば、よしなかるべきわざぞかし」など思ひ思ひ、はさまよ

りのぞけば、十四五ばかりの子どもみえて、いと若くきびはなるかぎり十二三ばかり、ありつる童わらわのやうなる子どもなどして、手ごとに小箱にいれ、物の蓋ふたにいれなどして、もちちがひさわぐなかに、母屋もやの簾すだれにそへたる几帳きちょうのつまうちあげて、さしいでたる人、わづかに十三ばかりにやとみえて、額髪ひたいがみのかかりたるほどよりはじめて、この世のものともみえずうつくしきに、萩襲はぎがさねの織物の桂うちき、紫苑色しおんいろなど、おしかさねたる、つらつゑをつきて、いとものなげかしげなる。

なにごとならむと、心ぐるしとみれば、十とおばかりなる男おのこに、朽葉くちばの狩衣かりぎぬ、二藍ふたあいの指貫さしぬき、しどけなく着たる、同じやうなる童わらわに、硯すずりの箱はこよりはみ劣おとりなる紫檀したんの箱の、いとをかしげなるに、えならぬ貝どもをいれて、もてよる。みするままに、

「思ひよらぬくまなくこそ。承香殿そきやうでんの御方おんかたなどに参りて、聞こえさせつれば、これをぞ求めもとえて侍りつれど、侍従じじゆうの君の語り侍りつるは、大輔たいふの君は、藤壺ふじつぼの御方より、いみじく多くたまはりにけり。すべて残るくまなく、いみじげなるを、いかにせさせ給はむずらむと、道のままも思ひまうできつる」

とて、顔もつと赤くなりていひみたるに、いとど姫君も心ぼそくなり
て、

「なかなかなることをいひはじめてけるかな。いとかくは思はざり
しを、ことごとしくこそ求め給ふなれ」

とのたまふに、

「などか求め給ふまじき。上うへは、内大臣殿の上の御もとまでぞ、請
ひに奉り給ふところそはいひしか。これにつけても、母のおはせましか
ば、あはれ、かくは」

とて、涙なみだもおとしつべき気色けしきども、をかしとみるほどに、このありつ
る童、

「東ひんがしの御方わたらせ給ふ。それかくさせ給へ」

といへば、ぬりこめたるところに、みなとりおきつれば、つれなくて
みたるに、はじめの君よりは少しおとなびてやとみゆる人、山吹やまぶき、
紅梅こうばい、薄朽葉うすくちば、あわひよからず。着ふくだみて、髪かみいとうつくしげに
て、たけに少ししたらぬなるべし。こよなくおくれたるとみゆ。

「若君のもておはしつらむは、などみえぬ。「かねて求めなどはす
まじ」と、たゆめ給ふに、すかされ奉りて、よろづはつゆこそ求め侍はんべ

らずなりにけれど。いとくやしく、少しさりぬべからむものは、わけとらせ給へ」

などいふさま、いみじくしたり顔がおなるに、にくくなりて、「いかで、こなたを勝かたせてしがな」と、そぞろに思ひなりぬ。この君、

「ここにも、ほかまでは求め侍らぬものを。若君はなにをかは」といらへて、ゐたるさまうつくし。うち見まわしてわたりぬ。このありつるやうなる童、三四人ばかりつれて、

「わが母のつねによみ給ひし観音経かんのんきょう、わが御おまへ負まけさせ奉り給ふな」

ただこのゐたる戸のもとにしも向きて、念ねんじあへる顔をかしけれど、ありつる童やいひいでむと思ひゐたるに、立ちはしりてあなたに往いぬ。いと細ほそき声にて、

かひなしとなになげくらむ白波しらなみも君がかたには心よせてむというたるを、さすがに耳とく聞きつけて、

「今かたへに聞き給ひつや。これは、たがいふべきぞ」

「観音のいで給ひたるなり」

「うれしのわざや。姫君の御まへに聞こえむ」

といひて、さいひがてら、おそろしくやありけむ、つれてはしりいぬ。ようなくことをいひて、このわたりをや見あらはさむと、胸むねつぶれて、さすがに思ひゐたれど、ただいとあわただしく、

「かうかう念じつれば、仏ほとけのたまひつる」

と語れば、いとうれしと思ひたる声にて、

「まことかはとよ。おそろしきまでこそ覚ゆれ」

とて、つらつゑつきやみて、うち赤みたるまみ、いみじくうつくしげなり。

「いかにぞ、この組入くみいれの上うえより、ふともものおちたらば、まことの

仏おんどくの御徳とこそは思はめ」

などいひあへるはをかし。「とく歸りて、いかでこれを勝たせばや」

と思へど、昼はいづべきかたもなければ、すずろによくみくらして、

夕霧ゆうぎりにたちかくれて、まぎれいでてぞ、えならぬ州浜すはまの三間みまばかりな

るを、うつほにつくりて、いみじき小箱をすゑて、いろいろの貝をい

みじく多くいれて、上には白銀しろかね、黄金こがねの、はまぐり、うつせ貝などを、

ひまなく蒔まかせて、手はいと小さくて、

白波に心をよせてたちよらばかひなきならぬ心よせなむ

とて、ひきむすびつけて、例の隨身ずいじんにもたせて、まだあかつきに、
門かどのわたりをたたずめば、昨日の子しもはしる。うれしくて、

「かうぞ。はかり聞こえぬよ」

とて、ふところよりをかしき小箱をとらせて、

「たがともなくて、さしおかせてき給へよ。さて、今日のありさま
のみせ給へよ。さらばまたまたも」

といへば、いみじくよろこびて、ただ、

「ありし戸口とぐち、そこはまして、けふは人もやあらじ」

とていりぬ。州浜こうちん、南の高欄こうらんにおかせてはひいりぬ。やをらみ通し給
へば、ただ同じほどなる若き人ども、廿人にじゅうにんばかりさうぞきて、格子こうし
あげそそくめり。この州浜をみつけて、

「あやしく、たがしたるぞ、たがしたるぞ」

といへば、

「さるべき人こそなけれ。思ひえつ。この、きのふの仏のし給へる
なんめり。あはれにおはしけるかな」

とよろこびさわぐさまの、いとものぐるほしければ、いとをかしくて
見ぬ給へりとや。